図書だより　No.1

令和２年８月 31 日号

図書委員のおすすめ本

「天久鷹央の推理カルテ」　知念 実希人　著

生物生産科　１年　伊藤　旭飛

僕のオススメする本は、「天久鷹央の推理カルテ」という本です。天医会総合病院に設立された特別部門、統括診断部には各科で「診断困難」と判断された患者が回されてきますが、統括診断部長である天久鷹央が天才的頭脳で病気を診断していく物語です。僕が思うこの本の魅力は、事件の裏には必ず何かしらの病があるところです。まず「診断困難」と言っても、ただ愚痴を言いに来た人や不思議なものを見たという人が統括診断部に来ています。その中に、鷹央の好奇心をくすぐるような話があったら、統括診断部に所属している小鳥遊優と一緒に調査し、話は謎に変わっていきます。そして謎を調べた先には必ず何かしらの病気を抱えている人が現れて、鷹央が診断するのですが、どのような病気なのかを説明しているシーンがあり、病気の症状が分からない自分でもよく理解できました。

メディカル・ミステリーが好きな人にお勧めします。

新規購入本の紹介

「廉太郎ノオト」　谷津矢車

若き音楽家・瀧**廉太郎**は、恩師や友人に支えられながら、数々の試練を乗り越え、作曲家としての才能を開花させていく。 そして、新しい時代の音楽を夢みてドイツ・ライプツィヒへと旅立つが……。 「西洋音楽不毛の地」に種を植えるべく短い命を燃やした一人の天才の軌跡を描き出す。

「フラミンゴボーイ」　マイケル・モーバーゴ

歴史のひとこまを力強く描く感動作品

一人のイギリス青年が、一枚のゴッホの絵をきっかけに訪れた南仏カマルグで、原因不明の高熱におそわれ動けなくなる。辺りにはフラミンゴが無数飛んでいた。気を失った後、助けられた家で不思議な話を聞くことになる。

第２次世界大戦の末期、南仏の田舎町カマルグにもナチスはやってきた。

そこで何が起きたのか……？

それは、フラミンゴと話ができる不思議な力を持つ少年とロマの少女の物語だった。

「キャパとゲルダ」：ふたりの戦場カメラマン

マーク・アロンソン　マリナ・ブドーズ

写真……それは、生き延びるための切符だった。

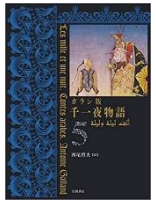
激動の 1930 年代、スペイン内戦を世界に伝えた二人のカメラマン、ロバート・キャパとゲルダ・タロー。

カメラを武器に危険な革命の前線に身を投じた、若き二人のドキュメンタリー。キャパはゲルダに写真を教え、ゲルダはキャパを戦場カメラマンとしてプロデュースした。

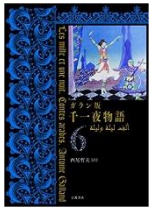
夢と理想にあふれた二人の素顔を貴重な写真とともに描いた一冊。

（裏もあります）

「ガラン版千一夜物語（５）（６）」



（５）…旅人に身をやつしたカリフ、ハールーン・アッラシードに出会った商人が、目が覚めたら一夜限りのカリフにされてしまう話、貧しい少年アラジンが、偶然手に入れた不思議なランプのおかげでスルタンの姫と莫大な富を手に入れる話、お忍びで夜のバグダードの街を歩くカリフが出会った人びとが語った奇想天外な話などが語られる。



（６）…「開け、ゴマ」の呪文で有名な「アリババと、女奴隷に殺された四十人の盗賊の話」、魔法の馬に乗って空を飛び、ベンガルの王女に出会ったペルシアの王子の話、美しい妖精と結婚した王子の話、スルタンと結婚した妹を妬んだ姉たちが捨てた子どもたちが密かに拾われて育ち三つの宝を探し出す話など、不思議な物語が語られる。

「ピカソになれない私たち」　一色さゆり

東京にある名門美大の油画科に属する美大生たちの、奮闘と葛藤を描いた青春小説。地方出身で天才的な画風の望音、技術はあるがこれといった特徴のない詩乃、美大生としての自身に迷いをもつ太郎、前衛的で現代的な作風の和美――。スパルタで知られる森本ゼミに属する４人は教授の森本の徹底的なダメ出しを受け、画家としての「才能」や、自身の将来に不安を感じながらも切磋琢磨している。そんなとき、森本ゼミに伝わる過去の放火事件の噂を聞き――。

「女性の死に方」　西尾元

現役の法医学者として、主に「異常な死に方」で亡くなった遺体と向き合う日々。近年、気になっているのが「女性の死」だという。高齢者層の増加に加え、伴侶との死別や離婚、未婚によってひとり暮らしの女性が増え、亡くなり方にも変化が予想される。現状、解剖に回ってくる遺体はおよそ７対３で男性が多いが、これから女性の比率が上がってくるのではないかと危惧している。さまざまな女性の解剖事例から見えてくるその未来とは。

「裁判官も人である」　岩瀬達哉

原発再稼働の可否を決め、死刑宣告をし、「一票の格差」について判断を下す――裁判官は、普通の人には想像できないほどの重責を負う。その重圧に苦悩する裁判官もいれば、個人的な出世や組織の防衛を優先する裁判官もいる。絶大な権力を持つ「特別なエリート」は何を考え、裁いているのか？

出世欲、プライド、正義感、情熱…生々しい感情が渦巻く裁判官の世界。これまで堅く閉ざされていたその扉を、粘り強い取材が、初めてこじ開けた。「週刊現代」連載時から大きな反響を呼んだノンフィクション「裁判官よ、あなたに人が裁けるか」に大幅な追加取材と加筆を行い、ついに単行本化。

「まったくゼロからの論理学」　野矢茂樹

「本気で伝えたい」「分かってほしい」――この本を貫くのは、教師が学生に論理学の魅力を届けたいと願ったその思いである。第Ⅰ部では記号を使わずに、日常の言葉の中で論理学の話題を取り上げる。そして第Ⅱ部では、記号を使ってそれを武器にしながら、現代論理学の基本的な体系である述語論理までを一望する。生活や仕事で論理的になりたいと思う人にもかならず役立つ一冊。

「食品の科学」が一冊でまるごとわかる　齋藤勝裕

肉を加熱すると硬さが変化します。60℃までは温度が高くなるにつれてやわらかくなります。しかし 60℃を越えると急激に硬くなり、75℃を越えると再びやわらかくなります。お肉をやわらかい状態で食べたいときは焼き過ぎないのがコツのようです。これにはもちろん理由があります。肉を形成している３種のタンパク質の熱変性の違いによるものです。このように、普段なにげなく、経験的に知っているような食品にまつわる特徴も、すべて科学で説明できるのです。本書は、すべての食材に含まれる「水」の説明からはじまり、さまざまな食品にまつわる科学について、易しく解説した入門書です。